

平成18年度 第4回 芦屋市文化行政推進懇話会 会議要旨

日 時	平成18年 10月23日(月) 15:30~17:00
場 所	北館4階 教育委員会室
出席者	<p>委員長 中川幾郎 委員 井垣貴子・植田勝博・駕海一吉・神棒眞一・久保田靖子 広瀬忠子・山田崇雄</p> <p>山中市長 藤原教育長・三栖管理部長・車谷学校教育部長</p> <p>事務局 松本社会教育部長・川崎社会教育部次長・白川市民センター長・ 長岡文化行政推進担当主査</p>
会議の公表	<p><input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開</p> <p><非公開・部分公開とした場合の理由></p>
傍聴者数	0 人

1 議題

芦屋における市民文化政策のあり方について

市の財産である市民の活用方法

- (1) 団塊の世代
- (2) 市内在住であるが他都市で活躍している人

2 懇話内容

上記「芦屋における市民文化政策のあり方について」という議題において、これまでの議論での確認事項である、芦屋の文化を考えるにおいて重要な要件である“豊富な優れた人材”の活かし方について、各委員の意見交換を行った。ポイントとして2つの項目を挙げてはいたが、特に区別しては行わず、自由に意見交換を行い、以下の点について了承・確認した。

[主な内容等]

- ① 芦屋の文化、芦屋市民のためにご協力いただける優れた人材については、市が公民館事業等で講師としてお願いした方など市の持っている情報の他、各委員などがこの方は…という方を紹介するのも良いのではないかと思います。
- ② ブランドというのは資産であり、創ろうとしても簡単に創れるものではないがそれを運用・活用することはできる。芦屋は潜在的な価値を持っており、それを高めることによりその価値を認める人たちが集まってくる。お金がお金を集めると言われるように、かつて芦屋の街の豊かさが、豊かな人を招いて、そして豊かな文化性を生んできたというような一つのプロセスがあり、それは十分回復できるのではないかと。
- ③ 人材価値の活用とは社会の人たちの財産の活用であり、若い人が比較的金銭を持っていないように、社会的な財産もいろいろな生活体験の中で身につけていくもので、そういう意味で人生の先輩というか、いきなり団塊の世代ではないと思う。芦屋においては特に、団塊の世代よりもっと前の世代から始めるべきで、芦屋に住む富裕層の中には打算は別に街のために非常に献身的にご奉仕いただける

環境をお持ちの方が大勢いる。その方たちが実質築き上げ、持ち続けた文化・経済を活用せざるを得ないので、そのような場を提供する必要がある。

- ④ 市内在住であるが他都市で活躍している人という人、その人が非常にジャーナリスティックに名前がある人ということになりがちで、極端な言い方ですが、そういう方はご自身のパフォーマンスが必要なものでこういう場ではなかなか難しいと思われる。だから、むしろジャーナリスティックな面は無関係に高い教養を持ち、いろんな意味で高いレベルで生活されている人を発掘し活躍の場を設定し、市民が参加して学ぶことを考えてはどうか。
- ⑤ 団塊の世代は人口に占める割合、数的なボリュームとある種、個性を持ったライフスタイルでこれまで時代を先導してきた世代でいろいろな特徴があげられ、ほかの世代とは違う大きなマーケットとして存在するので、どう生かしていくかが重要な課題である。
- ⑥ 国・県・他都市でも団塊の世代をターゲットとした様々な取り組みを行っており、具体例の資料をいくつか配布しますが、団塊の世代を対象とした講座を行うところや、相談等の窓口を開設するところ、また団塊の世代の意見・提案を地域づくりに取り入れようとするところなどがあり、そういう事例を学ぶのもよいのではないかと思う。
- ⑦ 市民の持てるエネルギーをどのようにしたら汲み取ることができるか、多くの世界に発信するような才能を持った方々をどのようにしたら支援し芦屋から発信していくことができるのかというシステム創りが重要。
- ⑧ 芦屋は昔からハイカラでモダニズムという点で、例えば写真やケーキ、車、犬など、すばらしい他ではなかなか無いようなものをお持ちの方も多く、そのよう方は専門的な知識も持っておられるので、マニアの街として発信すればよいのではないか。
- ⑨ 何を行う場合でも、継続性を持たせることは重要で、そのためにも長期的な視野で考えることが必要。
- ⑩ 市民文化のあり方ということで現在のように情報が氾濫している世の中で、具体的にどんな会合に参加したいと思うかを考えた時、内容に興味があり、出席した時に自分が質問することもでき、対話ができるということがあるかと思う。男性の場合は後にビールやお酒を飲んで楽しむという機会があれば、それを楽しみに出席するという場合も多いのではないか。そういう前提で考えた場合、行政に期待したいのは物理的な場を提供することである。
- ⑪ 既に京都や明石で実施しているが、自分の住む街を知ることが街を大切にすることにつながるので、芦屋検定をやってみてはどうか。
- ⑫ 市民提案型の共同事業をもっと増やす必要があるのではないか。
- ⑬ 市民参画の事業、つまり、市民が決定・実行・評価・修正のすべてにかかわる事業を行う必要がある。
- ⑭ 市民が自分達で施策提案をし、一定程度、行政も勇気をもって資金分担するような、金は出すが口は出さないということをどれだけ市として市民に同意を得られるかという議論が必要。
- ⑮ イベントを産業化し、街の中でイベントが展開しやすい仕組みやルールが必要。

〔結論〕 全会一致で了承、次回さらに次の段階として仕組み等について議論することを確認。

以 上